

# ADHD 様のある聴覚障害児と母親の変容に関する事例報告

—3年間の支援記録及び連絡ノートをもとにして—

○鈴木友里恵<sup>2</sup> 濱田豊彦<sup>1</sup> 大鹿綾<sup>4</sup> 喜屋武睦<sup>3</sup> 岩田能理子<sup>2</sup>  
 (東京学芸大学<sup>1</sup> 東京学芸大学大学院<sup>2</sup> 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科<sup>3</sup> 筑波技術大学<sup>4</sup>)

KEY WORDS: 聴覚障害、発達障害、保護者支援

**目的:** 近年、ADHD などの行動面にニーズのある聴覚障害児への教育的支援は喫緊の課題となっている。発達障害の支援は生活全般にわたって行われる必要があるため、家庭のみ・学校のみでの支援では不十分であり、子どもたちの生活の大半を占める家庭と学校との連携が重要である(原田, 2015)。筆者らは、3年にわたり ADHD 様のある聴覚障害児への指導を行い、同時に、連絡ノートを用いて母親とやりとりをする機会を得た。そこから明らかになった児童の特徴及び母親の感情の変容について報告する。

**方法:【対象】** 現在、聴覚特別支援学校小学部4年に在籍する男児(以下、a児)及びその母親。a児の良聴耳の平均聴力は93.8dBHL(装用時閾値は49dB SPL)で、主なコミュニケーション方法は口話及び手話。知的発達に遅れはない(FIQ101)。a児は妹(現在年長)と2人兄妹である。

**【a児の困難】** 医学的診断はまだないが、担任からは多動性と衝動性によるトラブルが報告されており、母親も投薬について現在検討中である。a児は興奮しやすく気持ちの切り替えが難しい。指導中に話を制御できず、おしゃべりが止まらないことがよくある。また、乱暴な言葉や相手に対し適切でない話し方を用いることも多い。対人関係では、人の気持ちが読めず悪気なく相手に言い過ぎてトラブルになることがある。自分の意見に固執し、相手の意見を受け入れにくいという課題もある。

**結果:** 2014年5月から2017年3月まで(小1~小3)、隔週に行った個別指導・集団活動(各45分)の活動記録及び保護者との連絡ノートを元に、a児と母親の変容をまとめた。

**【保護者連絡ノートについて】** 指導の度に、指導者が①本日の活動のねらい②指導内容③児童の様子の3点を記入し保護者に渡す。次の活動までに④保護者からのコメント⑤在籍学級担任からのコメントを記入してもらい、指導者が確認する。以上の流れを繰り返し、記録としている。

**【連絡ノートから(原文に加筆・取捨)】**

◆14/06/07 **活動開始前の様子:** (a児は)「時間がギリギリ」や、「遅刻」などあせる状態になるとあわててしまいパニックになってしまう所があるので今回(私が原因で)ギリギリ到着になってしまい彼に申し訳ないと…。◆14/06/21 **個別活動について:** 間違えや失敗をして落ち込むとしばらく切り替えができなかったのですが、少しずつ自分で状況を考えて行動してくれていて嬉しいです。→指導開始当初から、母親はa児の特性を理解し、その成長を実感しようとしていた。

◆14/07/05 **a児への関わり方について:** 家庭では成功や頑張った事に対してホメテルのですが、ほめるのが少ないのでしょうか。今度アドバイスをいただけたら嬉しいです。先生のはめ方を知りたいです。(指導者からの返答:注意しすぎてしまうと、落ち込んでしまい、楽しい活動も達成感をあまり得られないことがあります。注意される前に自分で気付ける手立てを考えていこうと思っています。)◆14/07/19 **指導者のコメントに対して:**「達成感」など、私も宿題をする際に厳しくしすぎてしまうので気をつけたいと思いました。楽しい気持ち“0”に近いです。◆15/01/10 **家庭での様子:** 家でも妹と言ひ合いになったりすると上手く伝わらなかったり、聞いてもらえなかったりすると怒って泣いてしまうことも…。

私も気をつけるようにしているのですが、何かアドバイスなどがありましたら教えてください。→母親は自分の言動を省みたり、第三者にアドバイスを求めたりするなど、子への関わり方をよりよくしようとする態度が見られた。

◆15/01/24 **学級担任から:** いろいろな遊びで、ゲームには勝ちたくて、負けると、とてもくやしがる時が1年の最初の頃はありました。が、今は、負けてもたんたんと終わりにすることができるようになりました。→a児は、学校でも気持ちの切り替えができるようになってきたことがわかる。

◆15/03/07 最初の頃は「人見知りもあり自分の話を聞いて欲しいから話を続ける」場面が多かったのですが年間を通して少しずつ変わってくる事ができて良かったです。→母親は、一年間を振り返り、a児の成長を実感していた。

◆15/07/04 私が口を出しすぎる部分があるので気を付けていきたいと反省です。◆15/10/31 実生活にできてくれたら、周りも本人も楽しくなるので、私が追いこまないように気をつけなければと思いました。→母親の自分自身の言動への反省は2年次にも継続して見られた。

◆16/07/02 **家庭での指導:** やり過ぎている場合で「妹の顔を見てみよう!もう大丈夫かな?やり過ぎかな?」と促してみたのですが、あまりピンとこなかったようです…。→母親がSSTの『表情の読み取り』の指導を実生活にも取り入れていることがわかった。しかし個別指導中は対応できても、実生活への応用は難しい場面が残っていることも示唆された。

◆16/10/15 **学校の運動会の様子:** 運動が苦手なお友達がいても応援ができるようになってきているようで、個別指導でのシミュレーションが身に付き始めているのかな?と感じました。◆17/01/21 **学校生活について:** 興奮しなければ少しずつですが相手の話を聞ける時が増えてきたと思います。頭の中で整理して、相手に言葉をかけるって親からするとかなりの進歩です。◆17/02/04 **集団活動について:** 集団活動は、同じグループのお友達と目的の為に相談をしてお互いに話を聞き工夫している姿が見れて良かったです。息子も活動で手応えがあったようで感想を自分から話してくれて私も楽しい一日になりました。→3年次後半には、あらゆる集団場面でa児の対人関係面の成長を感じられていることがわかる。

**考察:** 1~3年次にかけて助言を求める回数が増え、母親の中で子育ての方針が固まりつつあると予想される。自己反省の記述も少なくなり、3年次の春頃には服薬も検討し始めた。母親がa児の課題改善に対してよりポジティブな態度になったことが伺える。a児の成長に関する記述が多数見られたことから、筆者らの活動は母親が子の成長を感じられる一つの場として機能していると考えられる。また、a児の妹の成長で子育てに余裕ができたことも、母親のa児に対する楽観的な感想が増えた一因だと思われる。a児の成長を実感する一方で、実生活への般化の面では課題も残る。できるようになったことを評価しつつ、今後も衝動抑制や対人関係に関する支援を継続的に実施する必要がある。

本研究は科学研究費基盤研究(B)16H03809の助成を受けた。

(SUZUKI Yurie, HAMADA Toyohiko, OSHIKA Aya, KYAN Chikashi, IWATA Noriko)